

# 「知る」

エゼキエル書 12章20節

## 導入

今日の聖書の箇所は、エゼキエル書12章20節で、メッセージのタイトルは、「知る」ですが、預言者エゼキエルは、何を語っているのでしょうか？

4月、5月、6月と中高生の皆さんと、+有志の皆さんとラインで、イザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書を辿ってきました。

こよなく育ててきたわが子が、わたしに背いた。で始まるイザヤ書の特徴は、親不孝のこどもたちに、「あなたがたの罪がたとえ緋のようでも 雪のように白くなる（18節）。」「不純物をすべて取り除く（25節）。」と憐れみ深い父を示すことでした。その極めつけが、「立ち返る者たちは正義によって贖われる。」でしたね。主がわたしたち罪人をサタンから買い戻してくださる。主との間で罪と救いが交換される。わたしたちを束縛するものから解き放ってくださるというのでした。

エレミヤは、同じく憐れみ深い父を、わがはらわた痛む！と言い表しました。彼が、預言者として働いた時期は、南ユダが崩壊し、民がバビロンに捕え移されるという、最も暗い、悲劇的な時代で、同胞からも理解されない中、彼は、主が将来と希望を与える平和の計画を語り伝えましたね。主がご自身の民を顧みて、もとの所へ帰らせてくださると言われたからです。立ち直ったら、隣人を力づけるためにです。

エゼキエルはというと、彼の特徴は、同じく憐れみ深い父を、子たちが、「知る」ようになると言い表したことではなかったかと思われまます。彼が伝えたかったのは、彼が伝えるように導かれたのは、「知る」ようになるということでした。今日は、この「知る」ということを皆さんと見つめてみたいと思います。彼は、何を知るようになると言ったのでしょうか？

わたしが主である！わたしが主であることを知るようになる！これが、エゼキエルが担った、担わされたメッセージでした。エゼキエルの預言は、今や、終わりが来た。でしたが、神の審判によって初めて自分の罪に、誰を礼拝していたのかに目覚めるよう導かれた人たちがいました。何のためにですか？今朝は、そのところに注目させていただきます。それは、わたしが主であることを知るようになるためでした。

## 本論1

私は彼らの行いに応じて彼らを扱い 彼らの法に従って彼らを裁く。こうして彼らは私が主であることを知るようになる（7：27）。と主は言われましたね。彼らは私が主であることを知るようになる。すべてはここに至るのです。わたしたちの礼拝のクラ

イマックスはそこですね。ヘンデルのメサイアのハレルヤはそのことを唄いあげていますね。そこに至るまでは、何と主は忍耐の限りを尽くして、人の思う通りに任せられる。その中であらゆる隔ての中垣を取り除いていかれるのですね。エゼキエルは、その目撃者として召されました。

その時、彼らは私の民となり、私は彼らの神となる（11：20）。その時とは、主がご自身の民を約束の地に連れ戻されて、偶像を取り除き、かたくなな心を取り除き、新しい霊を授けて、柔らかな心を与えられる時ですね。しかし、忌み嫌うべきものの心を自分の心として歩む者には、彼らの頭上に彼らの行いを返すとも主は言われましたね。こうして、預言者エゼキエルは、主が彼に告げられたことばを、ことごとく捕囚の民に告げました。

人々の住んでいた町は廃墟となり、地は荒れ果てる。その時、あなたがたは私が主であることを知るようになる（12：20）。エゼキエルは、12章でバビロンへの捕囚を預言していますが、その預言は、聞いた人たちが甘く見ていたように、先延ばしされることなく、彼らが活着しているうちに成就しました。ですから、この時、「必ず成就する。」と言われたのでしたね。

「私は失われたものを探し求め、散らされたものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病めるものを力づける。．．．私は公正をもって群れを養う（34：16）。」とあわれみ深い主は言われました。正しい裁きをもって彼らを養うと約束されたお方は、ひとりの牧者を起こすとも言われました。それは、究極的には、イエス・キリストにおいて実現されるものですね。

捕囚となって25年目、都が破壊されてから14年目、まさにその日に、主の手がエゼキエルに臨み、主はエゼキエルにこれからどんな働きをなさるのかをもお示しになりました。それは、エルサレム陥落後になされたイスラエルの回復の預言でした。そこには新しい神殿が建てられ、真の礼拝が導かれるのだと。この希望のメッセージは、捕囚の民に語られた帰還のメッセージでした。その日からこの町は、「主がそこにおられる。」と呼ばれる（48：35）ようになりました。エルサレムの町は、東西南北にそれぞれ三つずつ門があって、イスラエルの12の部族の名前が付けられています。神の民が自由に出入りできることを示しています。エルサレムは、神ご自身の都であることを示しているのですね。

## 本論2

今朝注目させていただいている「知る」は、そうです。聖書で最初にこのことばが出てくるのが、創世記の3章の（22節）善悪を知るようになったの知るですね。アブラムが妻サライに「あなたが美しいのを、わたしはよく知っている。」と言いましたけれども。これが二番目でしょうか。イサクがエサウに「わたしは、年を取ったので、いつ死ぬかわからない。」と言ったときのわかるという意味がこのことばです。以下1000回以上このことばが聖書に出てきます。この「知る」はまた、気に掛けるとか関心をもつという意味ですね。ヨセフがエジプトに売られていった先で、ヨセフを買い取った主人ポ

テファルがヨセフを信任した描写のなかで出てくることばですが、気づくとか洞察するか識別する、見分けるという意味がありますね。

そうなんです。あなたがたは、わたしが主であることを知るようになる。とは、どなたが主であられるかがわかる。どなたが主であられるかに関心をもつ。このお方に気づく、このお方を洞察する、他の神々と識別する、見分けるようになる。と言っているのですね。告白するとかじっくり思い巡らすということでもあります。イザヤ書で最も知られている箇所で言うと、「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。」53章3節でしょうか。主が、イエスさまが、病を知っている。と知っただけで、病の中にいるわたしたちは、どれほど慰められるでしょうか！その極めつけは、わたしたちが死の床で知る、十字架にかかられたイエスさまですね。

## 結び

わたしたちは、自分をどれだけ知っているのでしょうか？4つの窓で覗いてみると、自分も周りの人も知っている自分がいます。開かれた窓ですね。自分だけが知っている自分がいます。隠された窓ですね。周りにだけ知られている自分もいます。見えにくい窓ですね。そして自分も周りも知らない自分がいるんですね。未知の窓ですね。わたしたは、これら4つの窓を通して、神さまが主であることを知るようになるんですね。

わたしたちは、自他ともに認めている自分に神さまが出会ってくださって、このお方が主であられることを知るよう導かれます。

わたしたちは、自分だけが知っている自分に神さまが出会ってくださって、このお方が主であられることを知るよう導かれます。

わたしたちは、周りにだけ知られている自分に神さまが出会ってくださって、このお方が主であられることを知るよう導かれます。

そして、自分も周りも知らない自分、未知の自分に神さまが出会ってくださって、このお方が主であられることを知るよう導いてくださるのですね。

人につまずいても、自分自身に絶望しても、安心してついていける信頼できるお方がおられます。わたしたちは、このお方が主であられることを知るようになります！

詩編23篇1節から6節。